

永福寺創建に関する『吾妻鏡』建久2年2月15日条の理解について

玉林 美男

はじめに

永福寺は源頼朝が創建した寺院である。永福寺の創建に至る経過は『吾妻鏡』文治5年12月9日条に「事始」の事があり、翌建久元年には奥州で騒動が起こった事から建立が延期され、建久2年になってから具体的に寺地の選考が行われたことが『吾妻鏡』同年2月15日条に見えている。同条には晩に及び寺地を選ぶために大蔵谷を歴攬したことが述べられているが、永福寺創建に当たってなぜこの日が選ばれたのか、『吾妻鏡』同日条の示す意味について、考古学的所見を踏まえ、納得いく説明をした論はない。⁽¹⁾このため、本論では『吾妻鏡』建久2年2月15日条の永福寺創建に係る記事と発掘調査によって明らかとなった遺構との関係を踏まえ、永福寺創建の意義について所見を述べてみたい。

また、中尊寺二階大堂大長寿院を模したとされるが、発掘調査成果を踏まえ何を模倣したのかも考えてみたい。さらに永福寺の本尊が釋迦如来であり、両脇に薬師如来。阿弥陀如来を配する三尊形式の寺院であることについてもその源流と意義を考察した論もないため、これについても探ってみよう。そして最後に、どのようにしてその位置が決められていったのかについても考察を述べてみたい。

『吾妻鏡』建久2年2月15日条の記事とその意味するもの

ここで『吾妻鏡』建久2年2月15日条の記事を確認しておきたい。「十五日甲午。風烈。鶴岡若宮臨時祭。流鏑馬已下如例。今日被始行經供養。法華三部。導師安樂房重慶當宮供僧一和尚(中略)及晩幕下歴覽大倉山邊給。爲建立精舍。得靈地給之故也。是去々年征奥州給之時。合戦無爲之後。鎌倉中可草創伽藍之由。有御立願。而彼年暮訖。去年奥州騒動。国土飢饉并御上洛等計會。依之無營作。於今者郡國悉静謐。民庶皆豊稔之間。漸有其沙汰。善信。行政。俊兼等可奉行之云々。」

この日、鶴岡若宮で臨時の祭礼が行われ、流鏑馬以下例のごとく奉納された。法華經三部の經供養が行われ、導師は當宮供僧一の和尚である安樂房重慶であった。(中略)晩に及び將軍は大倉山辺を歴攬された。精舍を建立する為である。これは一昨年奥州を征せられた時、合戦が無事に終了した後、鎌倉中に伽藍を草創しようとの願いを立てられた。しかしその年は暮、去年は奥州の騒動や国内の飢饉、御上洛等が重なって着手できなかった。今においては国中が静謐し、庶民も豊かであるので、漸く其沙汰があった。善信・行政・俊兼等がこれを奉行した。

何故この日に鶴岡若宮で臨時祭が行われ流鏑馬の奉納等が行われ、法華經三部の經供養が行われたのであろうか。この日は仏滅、涅槃の日である。そのため鶴岡八幡宮で臨時祭が行われて大乘仏教の根本經典であり、源頼朝の信仰する法華經が誦読され、流鏑馬が奉納されたと記されているのであろう。しかし臨時祭であり、何らかの目的を持ったものと考えられよう。その目的が、同日条後半に述べられて

いる伽藍を建立する靈地を求めるためであったと考えられる。

この日は西に太陽が沈むとほぼ同時に東に満月が上る。西行法師が「願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃」と詠んだ「如月の望月」とはこの旧暦2月15日、涅槃の日の満月である。この満月は涅槃図に必ず描かれる。『吾妻鏡』によれば「及_レ晩幕下歴_一覽大倉山邊_一給。爲_レ建_一立精舎_一。得_一靈地_一給之故也。」とあるから、頼朝は晩になってから涅槃の月に導かれて伽藍の適地を見定めるため大倉山辺を歴攬したのである。そのために神仏の加護を得るべく鶴岡八幡宮で臨時祭を執り行い、流鏝馬までも奉納したのであろう。やみくもに歴攬したのではなく、当然候補地は絞られていたと考えられる。

涅槃に当たって釈尊は「自分の死後は『法を依りどころとし、自らを依りどころとせよ』（自灯明・法灯明）といった」（中村元他編 1989）とある。「法」は仏の教えであり、具象ではそれを記した經典を意味する。法華經の信者であった頼朝は戦乱を終結させ、己と向き合いながら仏法による平和を望んだのであろう。保元の乱以降、奥州合戦までの戦死者供養（怨靈鎮護⁽³⁾）施設としての永福寺の創建に当たり、当時の貴族社会では当然考慮される気の不安定な良の方角を意識しながら、涅槃の望月が照らし出す谷戸の西側に月の位置と方角を確認しつつ、法を説く場である寺院の適地を歴攬したと考えられる。

永福寺跡における如月望月の観察

この『吾妻鏡』建久2年2月15日条の記事を確認するため、旧暦2月15日に当たる令和4年（2022）3月17日と同5年3月7日（前日が旧暦15日であったが7日が満月であった為）に永福寺で月の出を観察した。この結果、二階堂正面の尾根の窪んだ部分に最初に月光が表れ、月が上りながら二階堂正面の尾根上を南に移動し、経塚で尾根を離れ中天に上ることが観察された（写真1～6）。

旧暦2月15日（涅槃の日）、二階堂正面に現れた月光はしだいに満月の形を現し、経塚上から中天に上り境内を照らす。二階堂本尊である釈迦如来像には正面に月光が表れ、月の移動に従い経塚から光が差し込む位置に設置されたと考えられる。このため、月の運航に合わせて二階堂正面の尾根が整形されたと考えられる。

この如月望月の見え方とは別に、永福寺二階堂の須弥壇位置の中心と堂前池の東山上にある経塚はほぼ正東西に位置しており、彼岸には経塚を通して太陽の光が二階堂に差し込む事になろう。

まさにこの為頼朝は「及晩」伽藍の適地を月光に照らされて逍遥したのであろう。源頼朝は、当時は谷戸のほぼ中央を流れていた二階堂川に映る望月を見ていたのかもしれない。この時にはすでに候補地は絞られ、適地の確認に行ったと考えられよう。

勿論、月の出る位置は視点によって異なる。最初に月を見ることができるのは南側翼廊先端である。ここは前面の紅葉ヶ谷が東に深く食い込み、相対的に周囲と比べ山並みが低く見えるからである。池に突き出した部分は発掘調査では遺構が確認されなかったが、北側翼廊先端同様、釣殿が想定されている。この翼廊先端からは池に映る月が観察される（写真6）。この光景は阿弥陀堂からも見えたであろうから、阿弥陀堂の配置は亡者への供養の意味が在るのであろう。次に薬師堂から見える、東方瑠璃光浄土を表す光か。

経塚は塚が存在しなかったが、尾根上を緩やかに点に上る望月の運航を考慮して塚を造らなかったの
であろうか。二階堂須弥壇の正東に当たる経塚上を通過する望月は釈迦像を照らしたかもしれない。あ
たかも経が釈迦の教えを象徴するよう。望月は経塚の南で尾根が切れていることから中天に上り、境内
全体を照らすことになる。

なお、経塚と二階堂中央部はほぼ正東西にあり、経塚は秋分の日・春分の日に太陽が昇る位置に造ら
れ、その光が二階堂他伽藍に差し込むと想定される。

上記の様に二階堂の伽藍・施設配置には日月の運航と関わった仕掛けが施されており、来世に対する
より、現世に対する思いが強い伽藍配置となっている。

この事から、「娑婆即寂光」の思想によって造られた伽藍であり、庭園についてもその思想に基づき、
釈迦はじめ諸尊の実在する現世の浄土として造られたものと考えられる。頼朝は仏の寂滅後、しかも末
法の時代に、釈迦の遺言に従いその記念日を選んで、「氣」が最も不安定な良の方角に怨霊慰撫と常寂
光土の創出を目指して、「法」の具現である寺院造立にふさわしい霊地を求めたと考えられるのである。
永福寺二階堂の正東山上にある経塚は、二階堂と仏教教義上不可分の位置関係にある。この経塚は二階
堂建立と同時に造営されたのであろう。

馬淵和雄氏の理解

『吾妻鏡』建久2年2月15日条の記事について述べているのは馬淵和雄氏である(馬淵和雄1996・2020)。
少し長い以下、引用する。

「この日は陽暦では三月十九日、中日ではないが彼岸に相当する(内田一九七五により馬淵換算、馬
淵一九九六)。永福寺では春秋の彼岸、夕日は本堂の真上に落ちる。宇治平等院阿弥陀堂や無量光院阿
弥陀堂などと同じく、西方極楽浄土を演出するには、それは不可欠な要素である。ではなぜ頼朝はこの
日の、しかも早い時刻にこの地に来たのか。答えは明白であろう。彼岸の夕刻、太陽がどこに落ちるか、
それをたしかめに来たのである(馬淵一九九六、二五―三四頁)。なお、吉川弘文館『現代語訳 吾妻
鏡五』では「及晩」を「晩になって」と訳しているが、これでは頼朝の行為の意味が伝わらない(西田・
尹訳二〇〇九、一〇〇頁)。」

馬淵氏は「永福寺では春秋の彼岸、夕日は本堂の真上に落ちる」と述べ「彼岸の夕刻、太陽がどこに
落ちるか、それを確かめに来たのである」としている。しかし、太陽が西に落ちる状況を見定めるため
には夕刻早い時間でなければ、氏の指摘するように「西に衝立のような山を背負」う永福寺の中心伽藍
三堂の位置では夕日の沈む位置は確認できないのである。まして完成後の永福寺は南北中軸線が東へ約
15度傾いており、堂の真正面から日が落ちてくるわけではない。また堂前の空間は狭いから堂の後ろに
⁽⁴⁾
沈む夕日を見ようとすると池の対岸に位置する必要がある。通常は堂正面の位置から礼拝するであろう
から、例えば堂正面の池対岸の橋のたもとで夕日を見る事になる。しかし、2023年9月25日の彼岸中日
に観察したところでは、太陽は夕日になる以前に背後の山のかなたに隠れており、夕日が二階堂の背後
に沈むことを確認することはできなかった(写真7)。写真撮影は16時40分である。

馬淵氏はこうした事実を確認せずに論を展開されている。まして永福寺本尊は釈迦如来である⁽⁵⁾。「永福寺では春秋の彼岸、夕日は本堂の真上に落ちる。宇治平等院阿弥陀堂や無量光院阿弥陀堂などと同じく、西方極楽浄土を演出するには、それは不可欠な要素である。」と述べられているが、宇治平等院阿弥陀堂や無量光院阿弥陀堂は本尊が阿弥陀如来であるから「西方極楽浄土を演出する」のである。本尊「釈迦如来」に対してはどう理解するのであろうか。

馬淵氏は2月15日という日が何の日かご存じないらしい。確かに彼岸の内であるが、この日は仏滅、涅槃の日である。「及晩」は晩に及びで、「晩になって」の訳で良いのである。氏の述べる「晩い時刻」とはどう読むのであろうか。「晩い」は「おそい」である。馬淵氏は自説に都合よいように解釈しているだけではないか。馬淵氏の『吾妻鏡』建久2年2月15日条の解釈は全くの間違いである。

永福寺二階堂主尊釈迦如来像の性格

永福寺の本尊は釈迦である。『法華経』「本門寿量品」には釈迦が常にこの世において説法し、人々を悟りに導く、娑婆世界こそが仏の住する仏国土であるという「娑婆即寂光」という考え方があり、現世こそ釈迦の真の仏国土であり、それを創出していくのが人の使命であるという事であろう。法華経の信者であり、現実に戦争を指揮して戦乱を終結させた頼朝に取っては行動の基本的考え方であったのではないだろうか。この「娑婆即寂光」の考え方に立つのが、釈迦の靈山（りょうぜん）浄土、毘盧舍那仏の蓮華蔵世界であるという。華嚴経では釈迦の法身は毘盧舍那仏とされるから、釈迦と毘盧遮那仏は同体である⁽⁶⁾。二階堂の両脇堂は薬師堂と阿弥陀堂である。永福寺は中尊釈迦如来、両脇に薬師如来・阿弥陀如来の三尊形式の本尊を祀る寺院である⁽⁷⁾。

毘盧遮那は「輝くもの」を意味するサンスクリット語の音写で、薬師如来は東方瑠璃光仏、阿弥陀如来は西方無量光仏と称される。共に現世に法の光を灌ぎ、衆生苦しみを救う仏である。末法の世に法の光を灌ぎ、衆生を様々な苦しみから救い、悟りに導き、現世に仏の世界を造る為の寺が永福寺なのであろう。

二階堂本尊の釈迦如来像は永福寺のモデルとなった中尊寺二階大堂大長寿院の本尊阿弥陀如来像とは異なるのであり、永福寺と平泉の二階大堂大長寿院とは寺院建立に際しての根本的な思想が異なると考えられるのである。永福寺創建に当たり二階堂大長寿院を模したのは二階堂という建築様式と「主尊三丈、脇士九体丈六⁽⁸⁾」という堂内の諸仏の配置と荘厳であったのではないだろうか。この「脇士九軀」を藤島亥治郎氏は「九体阿弥陀」とした(藤島亥治郎 1995)が、主尊阿弥陀如来像に主尊であるはずの9体の阿弥陀像を「脇士」とするのは教義的に如何なものであろうか。「脇士」は「菩薩」や「明王」が相応しい。まして主尊を永福寺の場合「釈迦如来」としている。この場合どのような「脇士」とするのであろうか。さらに、二階堂大長寿院を模倣したとされる永福寺二階堂の遺構は藤島氏の二階堂大長寿院の復元とは異なる。二階大堂大長寿院はそれを模したとされる永福寺二階堂の遺構を基に復元を考えるべきである⁽⁹⁾。

そこで永福寺二階堂を基に「脇士九軀」の意味を考えてみたい。永福寺では来迎壁の後ろに広い空間

が生ずる。この事に注目してみると、ここにも須弥壇を設けることができる。ここに例えば東寺講堂諸像の内、大日如来の菩薩形を中尊とした「五大菩薩」⁽¹⁰⁾を配して『金剛界』を表し、正面には釈迦如来を中心に『胎蔵曼荼羅』の中央に位置する「中台八葉院」⁽¹¹⁾に現される「四菩薩」を配すれば、「金剛界」と「胎蔵界」の両界を表す脇侍9躰となる(図1)。釈迦如来像を中心に「金剛界」と「胎蔵界」を現したもので東寺講堂に表される羯磨(立体曼荼羅)の形をとって胎金一体の世界観を表したのではないだろうか。この場合、東密と台密では釈迦如来の位置づけが異なり、台密では毘盧遮那と釈迦は同体とされるから、三堂の在り様から考えると台密の考え方に沿った諸尊の配置となろう。「五大菩薩」は鎮護国家・天下泰平を説く『仁王経』も参考にされたというから、戦乱終結後の造仏としては相応しいのではないだろうか。大長寿院の場合、本尊は阿弥陀如来であるから、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語の四菩薩として金剛界曼荼羅の西輪を独立させた阿弥陀曼荼羅としたものではないだろうか。⁽¹³⁾釈迦如来と阿弥陀如来は同体とされるから、浄土教思想による主尊(阿弥陀如来)を法華経による主尊(釈迦如来)に変更したのであろう。

また大長寿院の本尊阿弥陀如来像は3丈、建物高さは5丈とあるが、永福寺二階堂の高さは6丈余と復元されるから、⁽¹⁵⁾本尊釈迦如来像は大長寿院本尊と同等或いはそれより巨像と考えるのが妥当であろう。平泉の奥州藤原氏を討滅して武家の棟梁に成り上がった源頼朝が、保元の乱以降の戦乱を収束させ、その犠牲者の総供養を行う寺として建立したのが永福寺なのであれば、討滅した藤原氏が造った寺院や仏像より規模の小さいものを造るであろうか。それより一回り大きいものを造ったと考えることが自然であろう。永福寺二階堂は大長寿院より一回り大きく、本尊釈迦如来像は3丈よりやや大きい巨像であったのではないだろうか。鎌倉最初の大仏であったのであろう。

この釈迦如来像は、薬師・阿弥陀如来を両脇に据えているから法身の釈迦であり、毘盧遮那仏である。直前に铸造が終わった東大寺大仏(毘盧遮那仏)に対して、法身の釈迦を表す「宝冠釈迦」であったのではないだろうか。熱海市伊豆神社には平安時代後期とされる大日如来像に似た高髻を結った阿弥陀如来像及び脇侍像(静岡県指定有形文化財)が伝えられている。⁽¹⁶⁾こうした例が源頼朝の近くであれば、そうした像様は存在しうるのではないだろうか。大長寿院本尊阿弥陀像は「宝冠阿弥陀」であったろう。「宝冠釈迦」像は鎌倉に特徴的な像である。或いは永福寺二階堂の釈迦如来像はその根源に当たるのかもしれない。

永福寺のモデル

永福寺の伽藍は二階堂を中心に薬師堂・阿弥陀堂を両脇に配し・複廊で繋ぎ、両脇堂から翼廊を伸ばして一体の伽藍としている。礼拝対象としての釈迦を中尊とし、薬師・阿弥陀を両脇に配した三尊を一体として祀っている寺院は現在でも極めて少ない。⁽¹⁷⁾それでは何故源頼朝はこのような稀有な三尊形式の本尊を持つ寺院を創建したのであろうか。源頼朝の時代に彼の近くにあったのが法隆寺である。法隆寺金堂では釈迦三尊を中央に薬師三尊を東壁、阿弥陀三尊を西壁に配している。この三尊を一堂に祀るのではなく各堂に祀り、複廊で連結させて三尊形式にしたのが永福寺であり、源頼朝の独創であろう。

平安京では2月・4月・11月に京内に住む人が畿内に在る氏神の地に出て祖先祭祀を行ったことが知られている（繁田信一 2005）。源頼朝が属する河内源氏は河内国古市郡壺井（大阪府羽曳野市壺井）を本拠地とし壺井八幡を氏神としていたから、為義・義朝を惣領として、毎年祖先祭に赴いていたことが推測される。建久2年の上洛に際しても訪れ、祖先祭祀を行ったのではないだろうか。ここに隣接して南東約1.5kmに聖徳太子陵とそれを祀る叡福寺があり、北東約13kmに法隆寺がある。源頼朝の少年時代、聖徳太子の遺跡は彼の非常に近くにあったのである。法隆寺には源頼朝施入とされる遺品が存在し、その関係性が伝えられている（東京国立博物館等編 1994）⁽¹⁸⁾。

永福寺建立に当たり、本尊形式は法隆寺金堂に倣ったと考えたい。法隆寺は現在では再建であり、金銅の仏像も創建当初のものではないとされているが、それが明確になったのは若草伽藍の発見以降であり、それ以前、頼朝の時代には聖徳太子建立と考えられていた。聖徳太子は用明天皇皇子で用明天皇2年（587）、天皇の没後の皇位継承を巡り、廃仏派とされる物部守屋との戦いに勝利し、崇峻・推古天皇を補佐して国家を安定させたとされ、法華義疏等の作者としても知られていた（坂本太郎 1986）。保元の乱から治承・寿永の内乱は皇位継承を巡る戦争であり、また東大寺・興福寺を焼失させた仏敵との戦争であった（田辺旬 2023）。また、頼朝も法華経の信者であった。この戦争は源頼朝をして自らと聖徳太子を結び付けることとなったのではないだろうか。聖徳太子が飛鳥京を離れ斑鳩に居を構えながら中央政府の政治に関わったのも、京を離れ鎌倉に在住する源頼朝との関連を想起させる。さらに源頼朝は清水寺で乳母が授与されたという観音像を身に着けていた⁽¹⁹⁾。頼朝の観音信仰はこれに表されるが、聖徳太子は観音菩薩の化身とされている（林幹弥 1987）。源頼朝と聖徳太子との関係は深いといわざるを得ない。源頼朝は末法140年の記念の年に、聖徳太子に倣い、自ら信仰する法華経の世界観を実現するために法隆寺を（理念上の）モデルとして永福寺を創建したのではないだろうか。

寺名「永福寺」は聖徳太子陵を祀る「叡福寺」に依ったのかもしれない。共に一般には「エイフクジ」と詠むが、現在「永福寺」は「ヨウフクジ」と称されている。これについて「エイフクジ」と呼ぶのが正しいとの三浦勝男氏の意見もあるが（鎌倉考古学研究所編 1997）、『新編鎌倉志』には「エウフクジ」のルビがふられている。「エウ」は歴史的仮名遣いで「ヨウ」と発音するから、「ヨウフクジ」と呼ばれていたことが分かる。「永」を「ヨウ」と発音するのは呉音で、中国長江下流域呉越地方の発音に基づくとされる（戸川芳郎監修 2001）。南宋期の中国語の発音であろうか。

永福寺の位置の決定とその方法

それでは永福寺の位置はどのように決められたのであろうか。源頼朝の時期、鶴岡八幡宮寺・勝長寿院（南御堂）・法華堂（奥州合戦戦勝祈願の堂）等、将軍の御願寺はその館の周辺に創建された。将軍御所の方位の起点となった場所は『吾妻鏡』嘉禄元年11月20日条の藤原三寅の若宮大路幕府移転に登場する三寅の当時の御所（伊賀朝行の勝長寿院前の館）の御寝所である。その位置についてはすでに述べ、その場所が大倉幕府の中心建物であることもすでに述べた（玉林美男 2021）。鶴岡八幡宮寺・法華堂についてはどのようにして位置が決められたかについても同様である（玉林美男 2018・2023）。今回

も同じ基点から考えてみたい。

『吾妻鏡』嘉禄元年 11 月 20 日条の藤原三寅の御所寝殿の地点を A とし、そこから正東方向に地図上に線を引くと稲葉越の東側に在る南北方向の尾根に当たる。⁽²⁰⁾ この尾根上の点から正北方向に線を伸ばすと永福寺跡の橋跡を通過する。そこで先の尾根上の点と A との距離を測ってみると 1/2500 の鎌倉市都市計画図上で 468m、尺貫法で 154 丈 5 尺 (468.135m) である。この点を B とする。B 点から正北に線を引くと橋跡の中央に在る大型のピットの中心付近を通過する。此のピットの中心を C とする。B・C 間の距離は 427.3m、141 丈 (427.23m) である。永福寺の南北軸は N-14° 43' 35" -E と報告されている (福田誠 2001)。これは 15° との差が 0° 16' 25" であり、当時の測量誤差、あるいは起点の置き方の際による誤差としても差し支えない範囲であろう。そこで 15° と考えて先に進める。C 点を起点に正北線を伸ばし、任意の距離 α の点を取る。この点を D とする。D から西方向に C・D と直角に距離 α をとり、その点を E とする。ここで E と C を結び直角三角形 CDE を造る。DCE の作る角度は 45° である。この時の CE 間の距離を β とする。次に C と E を起点に長さ β の円弧を描き、その交点を F とする。ここで作られる三角形 CEF は正三角形で、内角は其々 60° である。DCF の成す角度は 105° で、これに直行する南北線は N-15° -W であり、永福寺の南北軸線となる。この概念図が図 2 であり、遺構図と地形図の合成図に落としたものが図 3 である。C と二階堂来迎壁 (主屋の奥から 2 間目) までの距離は 1/200 の測量図で 48.5 m で 16 丈である。図 3 には御所の良の方位を示してあるが、正に A 点の N-45° -E に引いた線は二階堂の来迎壁裏の中央付近で二階堂東西中軸線と交差する。ここは五菩薩の中尊「金剛波羅蜜多菩薩」が安置されたと推定した場所である。正に二階堂は御所寝殿の良の方向に造営されたのである。⁽²¹⁾ この点からも A 点が大蔵御所の中心建物の位置である事が証明されよう。

まとめ

永福寺創建に当たり、なぜ源頼朝は 2 月 15 日に鶴岡八幡宮で臨時祭を行い、流鏝馬の奉納までして伽藍の適地を探したかについて考えた。2 月 15 日は仏滅・涅槃の日である。源頼朝は涅槃の月に導かれて伽藍の地を選定し、涅槃の月に照らし出されるように経塚と二階堂の位置を選定した。現地調査の結果、永福寺三堂は其々で月の見え方が異なるが、二階堂からは正面に月の光芒が現われ、尾根の稜線に沿って月が移動し、経塚を過ぎると中天に登ることが確認された。正に経塚を照らした光芒が二階堂を照らすように配置されている。また、経塚と二階堂の位置関係は正東西で、経塚上に上がった太陽は三堂を照らすことになる。正に「光り輝くもの」に照らし出される構造である。これは「法灯明」を演出したものであろう。これを演出した源頼朝は「自灯明」の境地であろうか。一方、その位置は頼朝御所において最も気の不安定な良の方向であった。

また永福寺二階堂が中尊寺大長寿院二階大堂の何を模倣したのかについて考えた。大長寿院の脇土 9 躰を鎮護国家・天下泰平を担う金剛界五大菩薩と金剛界曼荼羅の西輪の四菩薩の 9 躰と考え、天下泰平を祈る阿弥陀如来を主尊とする金剛界の立体曼荼羅と考えた。二階堂は大寺院であれば何処にでもある建物であり、京都に居た頃にはさほど珍しい建物ではなかったと思われるから、源頼朝が感銘を受け模

倣したのは、建築様式ではないと考えられる。源頼朝が感銘を受けたのは、阿弥陀如来を中心とした巨像群による立体曼荼羅であったと考えられる⁽²²⁾。立体曼荼羅は空海が創始したとされる東寺が著名であるが、台密の立場とは異なる。台密の東北の拠点寺院である中尊寺の二階大堂大長寿院にそれを見た時、源頼朝は深い感銘を受けたのではないか。永福寺二階堂の模範としての大長寿院の「脇土九躰」は筆者にとって大きな課題であった。元より主尊が異なるから、それを考慮したうえでの源頼朝の志向を考えねばならない。源頼朝は法華経の信者であったから、台密の教義に従い主尊を釈迦として永福寺二階堂を建立したのであろう。

永福寺の釈迦・薬師・阿弥陀如来の三尊形式の模範を法隆寺と考えた。法隆寺は少年時代の源頼朝には近い存在であったと考えられる。皇室の継嗣に関わる戦争で仏敵である一族を滅ぼし、都を離れて東国に在住する源頼朝は、自らを聖徳太子に擬えたのかもしれない。法隆寺は国家仏教が成立する以前の寺院で、「東関紀行」の作者が述べたように三尊其々が皆、衆生に光明を注ぐ仏である。法隆寺の三尊形式は曼荼羅将来以前の衆生救済を示す宇宙観を表す仏像群、立体曼荼羅なのではないだろうか。源頼朝が復興に尽力した国家仏教の総本山東大寺より以前の寺である。根本に帰り東国に仏国土を造ろうとする源頼朝の意思を感じる。

永福寺創建に当たっては『吾妻鏡』嘉禄元年 11 月 20 日条の勝長寿院前伊賀朝行の館の藤原三寅の御寝所が測量起点となっていた事を述べた。測量は勾股法による。稲葉越東の尾根は窟屋堂後山の測量点から東を見る際の測量点と考えられ、鎌倉の東西測量基軸線の基準点と考えられる。永福寺造営に当たってはこの基準点から永福寺の位置が決められたと推定した。翻って先の藤原三寅の御寝所は大倉御所の御寝所となる。

近年の永福寺研究では出土した仏像の装飾品から慶派の関与や出土瓦の検討などが行われており、新たな視点が加えられている（神奈川県立博物館 2022）。一方、『吾妻鏡』の記事についての誤記等まだまだ問題も多い。筆者は仏教教学や仏教史の研究者ではない。勘違いしている所も多々あるのではないかと危惧しているが、長く疑問に思っていたことについて自分なりの回答を示してみた。多方面からの研究を促すきっかけになればと思う。諸氏の御叱正をいただければ幸いである。

註

- (1) 馬淵和雄氏はこの日を彼岸の一部として日没を中心に論を展開しているが、『吾妻鏡』の記事の読み方・解釈を含め全くの間違いである。これについては本文の中で考察する。
- (2) 『吾妻鏡』治承 4 年 7 月 5 日条
- (3) 『吾妻鏡』文治 5 年 12 月 9 日条・『吾妻鏡』宝治 2 年 2 月 5 日条
- (4) 発掘調査報告では二階堂木造基壇桁行の方位を $N-14^{\circ} 43' 35'' -W$ と報告している（福田誠 2001）。これは $N-15^{\circ} -W$ を計画値とした場合、合致率は 98%。その差 $0^{\circ} 16' 25''$ は $\tan 0^{\circ} 16' 25'' \approx 0.0048$ で、三堂基軸線の中央を起点とした場合、例えば南北軸線上の北側 40 丈の地点では約 1.91 尺東にずれることとなる。これをどのように理解すれば良いかが課題となるが、或いは如月望月の光を二階堂正面に受けるための工夫かもしれない。
- (5) 鎌倉時代後期に成立したとされる歌謡集『玉林苑 上』（續群書類従巻第五百五十九）「永福寺勝景」に「安養の聖容は無邊の光を垂。浄瑠璃医王善逝。一代牟尼の尊像。諸聖衆みな各々。」とあり、三堂中央にある二階堂中尊が釈迦であることが分かる。また「安養の聖容は無邊の光を垂。」とあるのは正にこの三尊様式の特徴をとらえて

いる。

- (6) 梵語 Vairocana「輝き渡るもの」の意。『華嚴經』の本尊。太陽のように光明があまねく世界を照らす、宇宙的存在としての仏（『日本語大辞典』1989 講談社）。毘盧遮那仏 Vairocana は「輝くもの」、大日如来 Mahavairocana は「偉大な輝くもの」の意で、元は太陽の光照の事であったという。毘盧遮那仏が密教化されたものが大日如来である（『広辞苑』2018・2019 デジタル版 岩波書店）釈迦如来との関係は東密と台密では異なり、台密では毘盧遮那仏と釈迦如来は同体とする（三崎良周 1981）。
- (7) 『吾妻鏡』建久 5 年 12 月 2 日条には「永福寺」・「同阿弥陀堂」・「同薬師堂今新造」とあり、同寛元 2 年 7 月 5 日条には「永福寺并両方脇堂」とあり、発掘調査で確認された三堂がこれに当たるとされている。
- (8) 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 17 日条「二階大堂号大長寿院。高五丈。本尊三丈金色弥陀像。脇士九軀。同丈六也。」
- (9) 建築に関する事は故鈴木亘氏（元鎌倉市文化財専門委員会委員・史跡永福寺跡整備委員会委員 建築史）が常々指摘していたことである。
- (10) 金剛波羅蜜多菩薩・金剛薩埵菩薩・金剛宝菩薩・金剛業菩薩・金剛法菩薩 『金剛頂經』と『仁王經』という二つの經典で説いている内容に、弘法大師空海の考えを加味したものともいわれる（有賀祥隆 1988）。
- (11) 普賢菩薩・文殊菩薩・観音菩薩・弥勒菩薩。法・利・因・語の四菩薩像とされる。
- (12) 佐藤隆研編「大釈別体」『密教辞典 全』1975 法蔵館 464 頁
- (13) 佐藤隆研編「阿弥陀曼荼羅」『密教辞典 全』1975 法蔵館 15 頁
- (14) 覚鑿『五輪九字秘密釈』において大日如来と阿弥陀如来の同体が述べられ、大釈同体説において大日如来と釈迦の二而不二が述べられている。
- (15) 鈴木亘氏は本尊を丈六としているが、範とした二階堂大長寿院本尊と比べていかにも小さい。復元高は基本計画書の復元図（『中世鎌倉研究会シンポジウム 日本史の中の永福寺 予稿集』中世鎌倉研究会 2005.12 所収）を参考に試算した。
- (16) 熱海市ホームページ 教育委員会生涯学習課 伊豆山郷土資料館 脇侍は二体残存しているが、法・利・因・語の四菩薩像とされている。
- (17) 管見の及ぶところ日光輪王寺法華堂・法隆寺金堂と白杵石仏ホキ第六龕。ホキ第五龕は中尊が阿弥陀如来像とされる。
- (18) 建久年間に源頼朝が経帙を寄進している。
- (19) 『吾妻鏡』治承 4 年 8 月 24 日条
- (20) 『吾妻鏡』建長 4 年 5 月 5 日条は泉ヶ谷の北条時頼邸の方向を見た記事であるが、この時の起点は窟屋堂の後の山である。この位置が『吾妻鏡』嘉禄元年 11 月 20 日条の藤原三寅の仮御所の御寝所の正西方向に当たる地点である。ここから東西方向を見据えての方位測定となったと考えられるが、この時窟屋堂の後の山から見える尾根上に東方の観測点として指標となるものが設置されていたことが推測される。
- (21) 馬淵和雄氏も「幕府の鬼門付近に場所を求めた可能性は否定しない」としている（馬淵和雄 2020）。現状の大蔵幕府推定地では永福寺は鬼門に当たらない。それならば、大蔵幕府の位置について現在の推定地に固執する必然性はないはずである。
- (22) 筆者の大長寿院諸像に関する論考が是とされるならば、平泉に最古の石製五輪塔が存在するのはこれと関係があるのかもしれない。

参考文献

- 有賀祥隆 1988「第三章 密教の諸尊」『図説日本の仏教二 密教』新潮社
神奈川県立歴史博物館編 2022『源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人 一荘厳される鎌倉幕府とその広がり一』神奈川県立歴史博物館
鎌倉考古学研究所編 1997「永福寺創建 800 年記念シンポジウム 浄土庭園と寺院 記録集」鎌倉市教育委員会
坂本太郎 1986「聖徳太子」『国史大辞典』吉川弘文館

- 佐藤隆研編 1975『密教辞典 全』法蔵館
- 繁田信一 2005『平安貴族と陰陽師 安倍晴明の歴史民俗学』吉川弘文館
- 田辺旬 2023『戦死者たちの源平合戦 生への執着、死者への祈り』吉川弘文館
- 玉林美男 2018「方位から見た大倉御所（試論）」『かまくら考古』第37号 特別非営利活動法人鎌倉考古学研究所
- 玉林美男 2021「嘉禄元年における藤原三寅の御所移転とその位置について」『鎌倉市教育委員会文化財部 調査研究紀要』第3号 鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 2023「大倉御所（大蔵幕府）跡から見た鶴岡八幡宮・壇葛・若宮大路の位置と造営」『鎌倉市教育委員会 文化財調査研究紀要』第5号 鎌倉市教育委員会
- 東京国立博物館等編 1994『～法隆寺正和資財帳調査完成記念～ 国宝法隆寺展』NHK
- 戸川芳郎監修 2001『全訳 漢辞海』三省堂 788頁
- 中村元他編 1989『岩波 仏教辞典』岩波書店 648頁
- 林幹弥 1987「太子信仰」『国史大辞典』吉川弘文館
- 福田誠 2001『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書 一遺構編一』鎌倉市教育委員会
- 藤島亥治郎編著 1995『平泉建築文化研究』吉川弘文館
- 馬淵和雄 1996「永福寺の落日」『史友』第28号青山史学会
- 馬淵和雄 2020「大蔵幕府」考 一位置の検証を中心に一 『鎌倉』128・129号 鎌倉文化研究会
- 三崎良周 1981「円珍の胎金瑜伽記について」『印度學佛教學研究』59号 日本印度学仏教学会

(文化財課 遺跡発掘調査研究員)

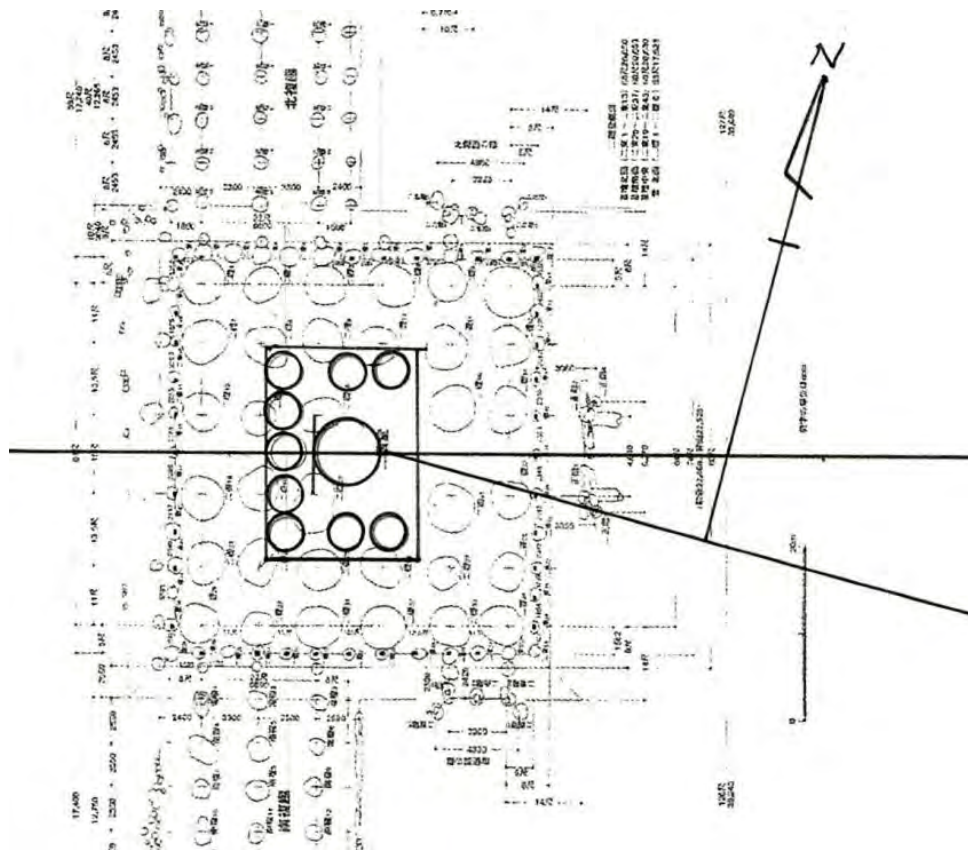


図1 二階堂諸仏配置案

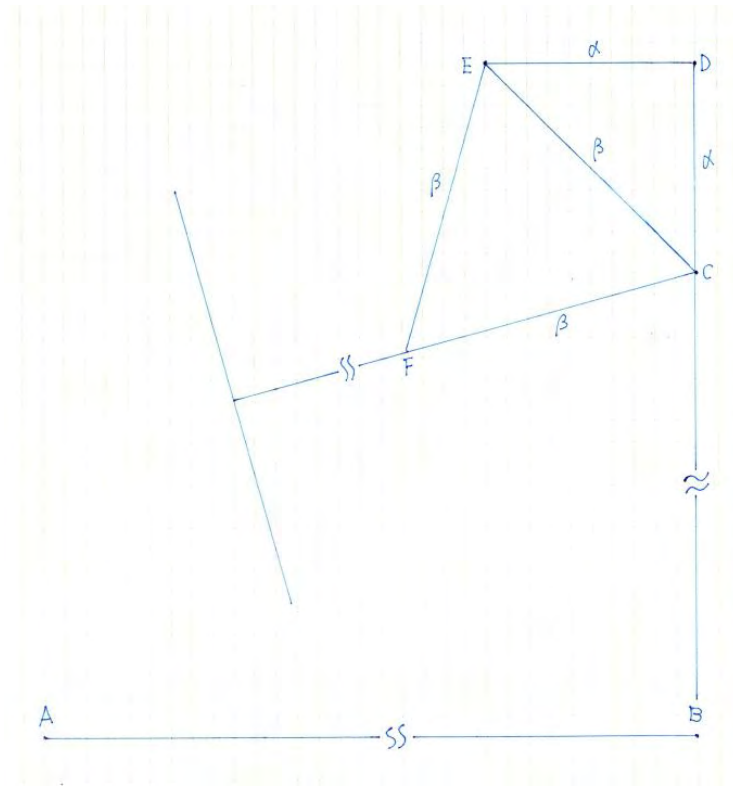


图 2 永福寺造営基準線(概念図)

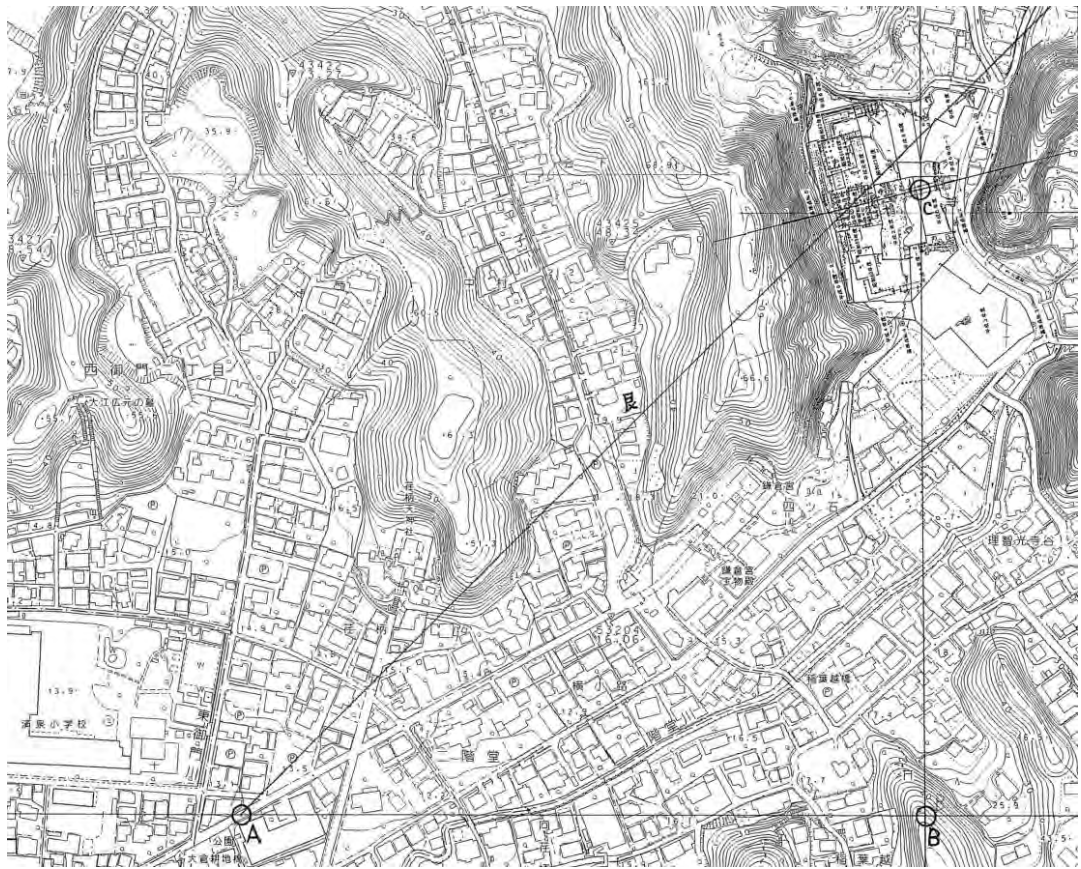


图 3 永福寺造営基準測量概念図



写真1 二階堂正面の尾根の形状(R3)



写真2 画面中央の木の中に現われた涅槃の月(R3)



写真3 経塚上(二階堂正東)の涅槃の月(R3)



写真4 永福寺経塚から尾根を離れる涅槃の月(R3)



写真5 阿弥陀堂前面での涅槃の月の出 (R5)



写真6 釣殿前の涅槃の月 (R5)



写真7 2023年9月25日秋分の日
の夕方の二階堂背後の情景(太陽は
すでに山の後ろに隠れている)